

## 「2017年インドネシア大学スプリングスクール 参加報告書」

京都大学 総合人間学部・3年 深谷拓未

タイ・ベトナムに続き、プログラムの参加も3回目となり、自分の中で東南アジア諸国を体系的に捉えるようになってきたという印象を持っている。いずれのプログラムにおいても、各々の国の環境・教育制度・価値観の差はあれ、同じ年代の学生との交流は大学レベル・個人レベルでとても価値があると確信している。

今回のプログラムの内容は、初級インドネシア講座、伝統文化体験、授業参加、現地見学、共同発表およびその準備である。いうまでもなく、休憩時間や週末などに現地学生と交流できた。

今回は特に、派遣先大学のプログラムの組み立てやマネジメントもさることながら、前2回のプログラムの反省を活かしたこともあり、共同発表およびその準備は円滑かつ充実していた。派遣前の現地学生との連絡の取り合いや準備に始まり、派遣期間中の平日に十分な議論の時間が持てたことにとっても満足している。そうした議論を通して、発表内容以外にも、教育制度・学習環境についても情報交換ができ、両国の差を実感することができた。

現地の人々と交流することは私の最大の楽しみであることは間違いないが、文化交流というものが自分の置かれてきた文化・環境を相対化することでもあるという点をこれまで以上に意識するようになった。今回の派遣では、自分自身の日本文化や日本語に関する知識が乏しいことや、相手の文化（多くは宗教に関すること）に関する知識を備えていなかったがために、違和感や自然な交流を妨げてしまい、口惜しさを感じたことが幾度かあった。ムスリムに関係する様々な規範に沿わないことがしばしばあり、私自身知らず知らずのうちに他に迷惑をかけてしまっていた。もちろん、あまりに一般化した文化解釈や、個人レベルの理解の範疇を超えた発言には注意しなくてはならないのだが、我々が日々当たり前遭遇する些細な文化的事象に対する関心とそれに対する文化的解釈の方法が欠けていたと反省している。というのも、会話のなかでの確かな発言ができなかったり、即座に適切な行動ができなかったりし、後になって言うべきだった内容やとるべき行動を思いつくということがしばしばあったからである。ただし、このような出来事によって文化の一端への着目と分析を徐々に洗練させることができたように思う。今後の学術研究の領域に限らず、異文化に接触する機会は多くあるであろうが、常に自他の文化に目を向け、大小数々の障壁を乗り越えた高度な文化的相互理解を促進・実践してゆきたいと思っている。

今後も専門である文化人類学の研究に励んでいくつもりである。このような志を抱きながらも、私と同年代の現地学生が自立に向けて努力している姿を見て、緊禪一番の思いである。さらに、今回のインドネシア大学スプリングスクールで得られた人的関係や文化体験を、自分の勉学や自分自身が国際的な場で生きてゆくための土台にしてゆきたいと思っている。